

この度、JALSG Young Investigator ASH Travel Award をいただき、ASH Annual Meeting 2016 への、私としては初めての国際学会参加の機会を頂きました。開催地 San Diego は、天候に恵まれた過ごし易い気候で、カリフォルニア州の中ではメキシコに近いこともあり南国の雰囲気も入り混じる魅力あふれる都市でした。最新の知見に触れられただけでなく、学会規模の大きさやリラックスできる Attendee services など、その会場を肌で感じられたことは大変貴重な経験と振り返ります。Educational Session や Plenary science session、Oral abstract など各種の session に参加し会場全体の雰囲気をも楽しんでできました。国内での小規模な講演会は多発性骨髄腫に関するものが多く、近年保険収載薬剤が増えてきたことを受けての流れと感じますが、ASH2016 では寧ろ急性白血病に関する話題も hot であった印象を持ちました。

Educational session では、多発性骨髄腫、急性骨髄性白血病などを聴きました。教育講演は ASH 2016 で報告される予定演題内容を交えながら平易な内容でありテーマ毎の理解が深まるだけでなく、学会中聴きたいと思う演題を pick up するのに役立ちました。

一般演題では、免疫チェックポイント阻害剤に関連した臨床試験が複数報告され、実臨床応用される機運を感じました。さらには、MDS において IDH inhibitor/SF3B1 inhibitor/ DOT1L inhibitor などの臨床試験の報告も多数見られ、症例毎の個別化の流れを感じました。

Plenary science session では、鎌状赤血球症や血友病などの日常診療で遭遇しにくい疾患の話の聴き新鮮でしたが、世界中で発展途上国などの経済事情・社会的資源を考えながら疾患アプローチを決めることの意義に思いを馳せる機会となりました。この session 中には Obulituzumab の濾胞性リンパ腫に関する GALLIUM 試験の報告もありました。Obulituzumab 併用での寛解導入及び維持療法群が、Rituximab 併用群と比しても無病増悪生存期間が延長したと報告され、GADOLIN 試験の結果と合わせて Obulituzumab の位置付けを決める結果報告と感じました。

Poster では、CIBMTR や EBMT などの多施設共同研究の結果が発表されているものもありましたが、単施設で少数例解析ながら着眼点よく考察されているものや T cell repatoir 解析などを積み重ねた解析の報告も目立ちました。単施設であっても 1 例ずつ丁寧に症例を積み重ねて診療していくことの大切さも感じました。

末筆ながら、このような機会を頂きました JALSG 及び関係各位に御礼申し上げます。今後の患者診療においてこの経験を生かしていく所存です。